

# 特集 文学教材で何を教えるか

## 抽象的思考につなげる文学教材指導

若松伸哉

### 一 文学教材を扱う目標

高等学校に限らず小中学校も含めた国語教育において、文学教材を扱った場合、その主人公や登場人物の心情を読み取ることが大きな目標の一つとなる。場面ごとの人物の心情を読み取りつつ、最終的には作品一篇のなかでの主要登場人物の心情変化を理解し、追体験することが児童や生徒には求められる。記述のなかに空白が多く、比喩表現などによって登場人物の心情を表そうとする文学作品を読むにあたって、書かれた言葉のなかから人物の心情を復元し読むことは言うまでもなく重要な学習課題であり、直接的に物事を表す機能的なツールとしての言語

の姿だけでなく、言葉のつらなりが一人の人間を、そして一つの世界を構築していくという言語のもつイメージの喚起力を感じるためにも重要なことだろう。

高校における国語教材においていわゆる〈定番〉となっている近代文学作品に、主要登場人物の心情が大きく変化する小説が多いのは偶然ではなく、以上のような事情が大きく関わっているはずだ。

### 二 〈他者〉の問題

芥川龍之介「羅生門」は高校国語教科書において圧倒的な掲載率を誇る、定番中の定番といえる文学教材だが、仕事で失った下人を主人公に、〈飢え死にか盗

みか〉という倫理的な命題を軸として、主人公の心情変化を追い、〈エゴイズム〉の問題に触れて終わるのが従来の一般的な授業の方向性といえる。

しかし、文学教材において、こうした主人公の心情変化を追うだけでなく、その心情変化に大きな影響を与える存在として〈他者〉の問題を考えてみるのも大きな意味をもつだろう。日常生活においても心情変化が閉じた個人のみで起こることは稀であり、それは人間の心情をリアルに描こうとする文学作品でも同様である。「羅生門」でいえば、下人の心情変化に大きな変化を及ぼすのは否定的な存在として登場する老婆であるし、中島敦「山月記」では友人・袁蓼との対話が、夏目漱石「こころ」ではKとの関係が、それぞれ主人公の心情変化に大きく関連している。

この〈他者〉は人間とは限らない。引き続き定番教材に即して言えば、志賀直哉「城の崎にて」では目撃する昆虫や小動物（の死）が、主人公の心情に大きな変化をもたらすし、太宰治「富嶽百景」では富士山という自然が、やはり主人公の心情に大きく関係してくる。定番となっっている文学教材には、実はこのよ

うな〈他者〉の問題も一貫して見出せるのである。閉じた〈個〉ではなく、世界のさまざまな〈他者〉の網の目のなかで存在する人間の在り方。また、文学教材を通して考えることのできるこうした人間観あるいは世界観についての抽象的な思考は、評論分野で頻出する〈自己と他者〉の問題を含めた抽象的な議論を読み解くことにもつながっていくだろう。

### 三 〈語り〉を考える

もう一つ具体的な作品内容から出発して抽象的な思考に至る方法として、近代文学研究では一般的となっている〈語り〉分析に注目しておこう。文学作品に〈語り〉分析の視点を導入すると、言語によるさらに複雑な世界観の構築の様相がほの見えてくる。

「羅生門」は下人の心情の推移が非常にわかりやすく描かれるが、その物語を語っているのは誰なのか。それは〈語り手〉という存在にほかならない。そして注意して「羅生門」本文を見てみると、〈飢え死にか盗みか〉という問題を提示しているのは、下人自身の言葉ではなく、下人の心中を語る（ように見せている）

語り手である。そもそも「羅生門」の語り手は、冒頭近くで自ら「作者」と名乗り出るような過剰な振る舞いを行う存在でもある。下人の心情の推移を代弁的に語るような体裁をもちつつ、〈飢え死にか盗みか〉という倫理的な問いを読者に提示することに、この語り手の偏向性はないだろうか。作品末尾についても、今後の下人の行方を曖昧にしながら、その実、〈盗み〉を決意した下人を強く喚起させる意図的な語りになっている。

自分の価値観を強く読者に押しつけているこの語り手の姿は例えば、「〈飢え死にか盗みか〉の価値観を本当にもっているのは誰か？」という発問のほか、「作者」の作中への登場、「下人が雨やみを待っていた」という記述への自己言及、フランス語「Sentimentalisme」を平安朝の物語に使う等、語り手である「作者」が、自在にそして恣意的に物語世界を語る箇所が小説中に書き込まれている点に注目させることでも浮かび上がる。物語を〈語る〉ということは、語り手が必ず読み手という〈他者〉を想定して行う極めて対他的な意識の強い戦略的な行為でもある。「羅生門」の物語世界は、「作者」を名乗る語り手によって大きく

操作されているかもしれないのである。

### 四 具体的理解から抽象的思考へ

このように、物語世界は基本的に一人の語り手によってかたどられ表現される世界である。それは自分語りである一人称小説であれ、客観的な視点を装う三人称小説であれ、原理的には同じである。物語は語り方によって大きく世界が変わるのであり、世界の創出とその多様性・相対性の問題がそこには現れる。ストーリーに注目するだけでなく、物語をどのように語っているかに注目することによって、対象を指し示す機能的なツールとしてだけではない、言語―そして語るといふ行為―による世界の認識や構築に関する非常に豊かで興味深い機構へ思考をめぐらす入口が開かれるのである。

内容を確認するだけの文学教材の授業では、生徒にとつても取り組みが難しい。授業のなかで文学作品読解を具体的な出発点として、文学以外にも連動していくような、より深い人間・世界・言語についての抽象的な思考を生徒たちにも体験させる構えが必要ではないだろうか。

（わかまつしんや・愛知県立大学）